



Jeff Cooke/ICRC

NEWSLETTER

赤十字国際委員会ニュースレター

【目次】

ICRC総裁ペーター・マウラー世界の現場を語る	1
特集：忘れ去られた人道危機 コンゴ民主共和国	2
日本とICRCの関わり	3
赤十字の輪・駐日事務所通信	4

ICRC総裁 ペーター・マウラー 世界の現場を語る

予測不可能で様々な要因が複雑に絡まる現場では、支援を必要としている市民へのアクセスも困難に

中東やウクライナ、アフリカのサヘル地域でみられるように、昨今の紛争というのは、国家を超え、地域レベル、グローバルな次元にまで広がりをみせ、多くの国が人道危機に直面しています。シリアでは、4年にもおよぶ紛争で、経済活動は停止し、高いインフレにより人々はこれまでと同じ仕事にも就くこともできず、失業率は上昇しています。シリアは単に一例にすぎず、世界のいずれの国においても国家制度が崩壊すれば、医療や水・衛生システムも打撃を受け、ポリオの再発やエボラ出血熱などの伝染病の蔓延に歯止めがかかりません。

中立かつ公平、独立した人道支援組織として、全紛争当事者から受け入れられ、紛争の犠牲となっている市民へのアクセスを確保することが私たちの課題です。シリア北部アレッポでは、政府側、反政府側双方と6か月間交渉し、支援物資の搬入路を確保しました。IS(イスラミックステート)支配下のラッカでは、活動を継続している唯一の人道支援組織として、病院の運営を続けています。

膨大な人道ニーズに対応するためにさらなる支援を

今年の全体活動資金予算は、約1,858億7400万円(16億スイスフラン)と2年前の訪日時と比べ、45%も増加しています。しかし、紛争の数、それらが与えるインパクト、背景、暴力行為の性格が劇的に変化し、膨大な人道ニーズに支援が追いついていないという現実には私たちは直面しています。

予測不可能で様々な要因が複雑に絡み合う紛争の現場では、人道支援もより困難を極め、職員の身の安全を確保することも難しくなります。私たちは、全紛争当事者と対話を行い、国際人道法を尊重するよう働きかけるといった従来の活動を引き続き強化していきます。同時に、地域レベルで対応するための支援プログラムを増やし、私たちの地域事務所を活用しながら、新しいタイプの人道危機において国際赤十字・赤新月運動との連携を深めていきます。

紛争下における性暴力問題への取り組みなど、日本とICRCは問題意識を共有している。人道課題に立ち向かっていく上で、協力関係を強固なものにしていきたい

私たちの人道支援を評価し、支援して下さる日本政府に感謝しています。日本の外交政策では、中東とアフリカ地域が重点地域であるように、私たちの活動全体の3分の1も中東地域に、44%はアフリカに集中しています。また、紛争下における性暴力の解決にも日本は積極的であり、私たちも戦略を立て、現場では優先的に取り組んでいます。紛争や兵器のあり方が変化するなか、サイバー戦争や遠隔操作による戦いにおける国際人道法の適用について、日本が高い関心を示していることも評価するとともに、日本とICRCが重視する課題や地域が一致していることを再確認でき、うれしく思います。ICRCにとって日本は、活動資金拠出額がトップ10に入る重要なパートナーであり、人道課題に立ち向かう上

で、協力関係をより強固なものにしていきたいと考えています。

私たちの使命は核兵器の非人道性を各国に訴え続けること

人類の良心と意識に消せない記憶を残した広島と長崎への原爆投下から、今年で70年になります。今回は、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の近衛忠輝会長とともに、ICRC総裁となって初めて広島を訪れ、平和記念資料館を見学し、被爆者の証言を聞くことができました。

近代における戦争の転換点となった原爆投下は、現在でも、生存者そして日本人の日常に影響を落としていることが心に深く刻み込まれました。70年前、当時駐日代表部首席代表であったマルセル・ジュノーと日本赤十字社の職員は原爆による人々の苦しみを軽減するため、想像を絶するような状況のなか活動を展開しました。この経験から、1945年9月には核兵器がもたらす人道的影響は受け入れがたいものである、という結論を出しています。それ以来、国際赤十字・赤新月運動とともに、各国に対して核兵器の禁止に合意するよう呼びかけています。

5月には、核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議が始まります。核兵器が持つ破壊力と人道被害の規模だけでなく、健康への影響が何十年も続くこと、核兵器投下後は迅速な人道支援を提供することが不可能なこと、誤作動や誤報など偶発的なリスクが非常に高いことを国際社会は認識しています。議論はされ尽くしました。核兵器廃絶に向け、国際社会が確固たる行動に踏み出すことを期待しています。

2月13日來日記者会見より
(於：日本記者クラブ)

【表紙の写真】

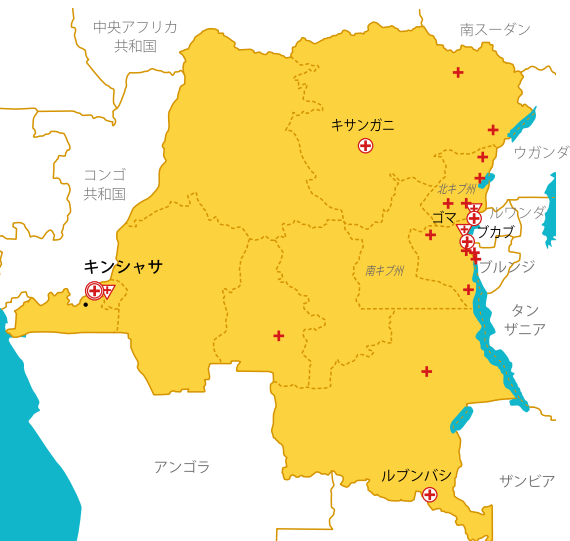
広島平和記念資料館を訪問するICRC総裁マウラーと国際赤十字・赤新月社連盟会長の近衛氏

最新情報は
公式Twitterで配信
@ICRC_jp



ICRC

忘れ去られた人道危機 コンゴ民主共和国



⊕ ICRC 代表部 ⊕ ICRC 副代表部 ⊕ ICRC その他の拠点
▽ ICRC の支援による義手義足 / 矯正センター

戦後70年の今年、日本では過去の戦争を見つめ、改めて平和のありがたみを考える節目となります。その一方で、遠く離れた世界の片隅では、戦闘が現在進行形で繰り広げられ、日々恐怖におびえながら暮らしている人たちがたくさんいるのも事実です。

シリアやウクライナなど、国際社会の注目を集める人道危機もあれば、長年暴力の応酬が続き、事態が膠着していることでニュースにも取り上げられない、いわば「忘れ去られた」人道危機も多く存在します。

今号の特集では、紛争に端を発した人道問題が山積する、コンゴ民主共和国(DRC)に焦点を当てます。私たちが決して見過ごしてはならない人々の苦しみ、そこにはあります。

世界最大級の人道危機

人口・面積ともアフリカ第2位の大きさを誇るコンゴ民主共和国。多くの国と国境を接していること、そして非常に豊富な天然資源を有するがために、諸外国の利害や部族対立、紛争が絶えることはあ

りませんでした。2003年に内戦が終結し、2006年にはベルギーからの独立後初となる民主的な選挙が実施されたものの、紛争や暴力、病気、飢え等による死者が1990年代以降540万人以上にのぼると推定され、第二次世界大戦以降、世界最大の人道危機の一つとなっています。



ICRC がサポートする社会復帰プログラムに参加する元子ども兵士

苦痛を強いられる一般市民

私たちは、DRCがまだザイルと呼ばれる時代には代表部を開設し、1960年から支援を展開しています。現在、特に同国東部の北キブ州と南キブ州では、国連コンゴ安定化派遣団(MONUSCO)の後押しを受けた政府軍と武装勢力間だけでなく、武装勢力同士の戦闘が激しさを増しています。報復攻撃や部族間の緊張の高まりと重なって生活基盤を破壊し、多くの犠牲者と避難民を生み出しています。

北キブ州での人道危機悪化の一因となっていた武装勢力「3月23日運動」(M23)による攻撃は、2013年11月に鎮圧されたものの、爆発性戦争残存物(ERW)が負の遺産となって近隣のコミュニティを恐怖に陥れています。また、裁判を経ない処刑や性暴力、子どもを強制的に兵士に採用するなど、暴力の連鎖が後を絶ちません。インフラや基本的な社会サービスが崩壊し、多くの人が経済的に困窮しているため、隣国のアンゴラに不法に避難する事例も増えています。

性暴力被害者への支援と子どもの保護

DRCでは、避難民への支援や被拘束者の訪問、医療支援、給水設備の整備などに加えて、性暴力被害者への支援と子どもの保護に力を入れています。

ICRCが同国で支援する40のカウンセリング・センターで精神的サポートを受けた性暴力被害者は、2013年だけで4544名に上ります。2205名は、私



ICRC と DRC 赤十字社、ウガンダ赤十字社の支援の下、2年ぶりに母親と再会する少年

たちが運営する近隣の病院で治療を受けました。性暴力被害者が社会から隔離されないよう、啓発活動にも力を入れていて、カウンセリング・センターの活動内容を紹介し、被害に遭った場合には72時間以内に予防治療を受けるよう呼びかけています。

紛争や暴力に伴う事態が原因で離散した家族、特に保護者のいない未成年者や子どもに対し、私たちはDRC赤十字社と協力して、家族の連絡回復・再会支援を行っています。2014年の一年間で、800名以上の子どもが家族との再会を果たしました。そのうち、武装勢力やグループに関わっていた元子ども兵士は約300名に上ります。

家族と再会を果たしたのち、元子ども兵士の社会復帰が円滑に進むよう、北キブ州と南キブ州の11カ所でコミュニティ主導の社会復帰プログラムをサポートし、子どもが二度と兵士として勧誘されることがないように予防活動に取り組んでいます。教育や訓練プログラム、文化的活動を通して、子どもは同年代の人たちや年長者と接する機会を持ち、社会復帰後に待ち受ける現実とその対処について学びます。

戦後70年企画として、ICRC駐日事務所では、紛争地での現実を広く知ってもらうため、「MANGAのチカラ」プロジェクトを立ち上げました。そのマンガの舞台となるのが、コンゴ民主共和国(DRC)。紛争によって苦痛を強いられている一般市民の生活を描くことで、日本であまり身近に感じることはない世界の人道危機をはじめ、ニュースや数字からは見えない人々の苦しみや悲しみ、そうした状況を生き抜く人々の強さを伝えます。

次号の特集では、この「MANGAのチカラ」プロジェクトをご紹介します。

ICRC の活動現場を訪ねて

山際大志郎さん

経済産業副大臣 / 自由民主党衆議院議員



山際氏…ICRC主催のイベントで、紛争下における性暴力というものが大変ひどい状態にあるということを知り、最終的には私たちがそれを見に行くべきじゃないかという話になったんです。日本は、ICRCに対して資金を供与しているという立場でもあるので、日本のお金がどのように使われているかを確認するのも、私の役割だと思ったんです。

Q・性暴力の被害に遭われた方にお会いされましたね。

山際氏…聞く家では、実際被害に遭われた方々に面会し、生々しいお話も随分伺いました。大変痛ましく、日本のような平和な社会では考えられないようなことが実際に起きているということを知りました。性暴力を受けたと社会から阻害されがちなのですが、「聞く家」に行けば話を聞いてもらえる。そして医療や心理的ケアが必要だということになれば治療も受けられる。治療を受けた方は、もう一度生きようという気持ちになってビジネスを始められ、お子さんをきちんと育てているんですね。弱い立場に置かれた人なのに、人間の強さがそこにはあって、実際に被害に遭われた方とお話をすれば、その強さのようなものを感じるので、これはやはり希望だよなあ、と実感しました。

Q・ICRCは紛争下での性暴力を「予防可能な悲劇」としていますか。

山際氏…結果として何故このようになってきたか、起きているのか、というその根っこ部分には、地域社会が持つている共同意識みたいなものがあるのだと思います。私は皆さんの方にお会いして、その根っこ意識とは何なのかを探りました。皆さんが口を揃えて言っているのは、「女性は一番大切な財産だ」ということでした。彼らの言う「財産」とは、物だったんです。大変な衝撃を受けた。恐らく先進国の皆さんも同じような衝撃を受けるでしょう。お嬢さんをもうらう時に、牛数頭と交換します、という感覚なんです。ですから、社会そのものにも人権という概念が存在しない、ということだと思っただけです。そこから変えていかなければいけません。

これは本当に難しいと思うんですけど、時間軸をどうとるかです。日本だって昔と比べて女性の評価や地位は上がってきています。社会が変わっていくに従って、人権を少し意識するようになら、そういう時がアフリカでもやってくるんだらうと思います。でもただ単に待つのではなく、恐ろしく色んな形で働きかけをすれば人権意識が芽生えるスピードというものは早くなるのではないのでしょうか。そうしたら恐らくICRCの言うように、予防できるんじゃないかと思えます。

在ペルー日本大使公邸人質事件

日本とICRCが大きく関わった事件の一つに、1996年12月から1997年4月に起きた在ペルー日本大使公邸人質事件があります。今回は、この事件でICRCが担うことになった多様な役割と「中立」を掲げるがために直面した課題を、2号にわたり取り上げます。

事件の発生と背景

1996年12月17日(現地時間)、ペルーの首都リマにある日本大使公邸では、天皇誕生日の祝賀パーティーを開催していました。事件は、トゥパク・アマール革命運動(MRTA)の武装グループに襲撃されたことから始まります。MRTAは、ペルー政府関係者や外交団、ペルーに駐在する日本人を含む数百名を人質に、公邸を占拠し、立てこもりました。刑務所に収監されている仲間の解放や逃走の保証、自由主義経済政策の変更、戦争税の支払いの4項目を要求し、組織の再生を図ろうと考えたのです。

当初600名余りであった人質は、段階的に解放され、最終的に残ったのは72名(うち、日本人24名)でした。事件は1997年4月22日に終結しましたが、解決まで127日(約4カ月)と長期にわたりました。

ICRCの人質事件への関与

ICRCは1984年にペルー代表部を設けてから、刑務所に拘束された反政府組織のメンバーを訪問するなど、ジュネーブ諸条約に基づいた人道支援に

と自ら名乗りをあげ、公邸内の武装グループに対して人質の保護と解放を呼びかけました。その結果、女性や高齢者、病人などが段階的に解放されることとなります。ミニグは公邸内外の出入りを認められ、「公式の仲介者」として、政府とMRTAの橋渡し役を担うことになりました。これは、ICRCの「人道的イニシアチブをとる権利」の行使にあたります。仲介者となった背景には、1984年以来ペルーで行っていた人道支援により、MRTAと政府双方からの信頼を得ていたということもありました。

また、終結に至る道のりの中で、事件の平和的解決を目的とした保証人委員会¹が発足され、ペルー政府のパレルモ教育相、シブリアーニ大司教、カナダのヴィンセント駐ペルー大使に並び、日本政府代表の寺田駐メキシコ大使とともにオブザーバーとしてミニグが加わりました。しかしミニグは解決策を練る他の4人とは異なり、人道問題に関わる課題に限って関与する、という立場を貫きました。

事件から6日後には、日本赤十字社の医療班5名が現地へ赴きます。限定的だったICRCの医療支援をサポートすることに加え、多くの日本人の人質に日本語での対応を行う必要がありました。

中立な組織としての役割

ICRCは、公邸内にとどまる人質に安心感を与え、保護すると同時に、彼らの解放と事態の悪化を防ぐことを目指しました。いくつかの人道支援が同時並行で行われた珍しいケースであったともいえます。

政府とMRTA双方の合意により、ICRCや日赤の医療



現場で活動する日本赤十字社の医療班

ミニグ自らも、言葉のハンデや文化の違いからくる公邸内の日本人の精神的影響を案じて、個別のカウンセリングを行いました。日本人のいる部屋に入るときは靴を脱いで床に座り、事件でのICRCの役割や仲介役となっている理由、ICRCの中立性を中心に静かに語りかけたといえます。

そして事件終結までの間、計9588通の「赤十字通信」を通して、公邸内の人々とその家族をつなぎました。「赤十字通信」は通常、紛争や災害で家族と離ればなれになった人々を結ぶ、赤十字が配達する「便り」のことをいいます。日本人の家族間であってもメッセージのやりとりはスペイン語で行われ、ICRCのチェックをはじめ政府当局、MRTA側双方の検閲を受ける必要がありました。

ICRCは人質の保護と支援だけでなく、「中立」の仲介者としての活動にも取り組みました。膠着状態だった事件において、予備的対話²の舞台を設定し、保証人委員会のメンバーとして、人道に則った役割を果たしました。ペルー警察が装甲車を配備して公邸周辺の警備を強化するなどの示威行動に出た際に、白線を引き「中立ゾーン」を確保。また、公邸周辺の民家を対話の場所として使用できるよう仲立ちし、武装グループを公邸から輸送する際にはロジスティックス面での調整を行いました。紛争下しかり、ICRCは中立・独立・公平を掲げる組織として、人質の解放そのものの交渉はいかなる時も行いません。(次号につづく)

1. ペルー政府とMRTAの間で行われた直接交渉において、中立的な立場からサポートを行った第三者機関。
2. ペルー政府とMRTAとの正式交渉に先立ち行われた対話で、保証人委員会により開催された。



中立の立場を保ちつつ、ゲリラ側との交渉に向かうミニグ

あたってきました。当時ペルー代表部で首席代表を務めていたミシェル・ミニグが偶然、大使公邸でのパーティーに出席していたことから、ICRCはこの事件に深く関わることになりました。事件直後は、ジュネーブ本部に危機対策班を設けました。

その場に居合わせたミニグは、ICRCの職員である

班は様々な活動を本格化させていきました。人質の解放や尊厳の確保に力を尽くし、MRTAには国際人道法遵守を訴えました。人質となった人々に対しては、公邸内に食料や飲料、衛生用品、ゲーム、書籍、楽器などを提供。また、毎日医療チームが訪問して健康チェックを行い、家族の心のケアも行いました。

取材協力 | ■日本赤十字社 中田晃氏

参考資料 | ■各紙新聞記事 ■ICRCニュース・リリース ■共同通信社ペルー特別取材班『ペルー日本大使公邸人質事件』1997 ■共同通信社

2009	2004	1977	1953	1949	1945	1942	1941	1939	1937	1931	1920	1919	1914	1904	1894	1887	1876	1877	1876	1873	1871	1867	1864	1863	
駐日事務所開設	約追加議定書へ加入	日本政府、ジュネーブ諸条約追加議定書へ加入	ジュネーブ諸条約追加議定書の成立	ジュネーブ諸条約の成立	終戦	広島・長崎原爆投下	表部設置	赤十字国際委員会駐日代表部設置	第二次世界大戦勃発	太平洋戦争	日中戦争	満州事変	ル記章受章	人が第一回ナイチンゲール記章受章	日本赤十字社の看護師3人が第一回ナイチンゲール記章受章	赤十字社連盟の創設	第一次世界大戦	日露戦争	日清戦争	日露戦争	日露戦争	ボイコット	ボイコット	ボイコット	ボイコット

赤十字の輪



©2015「風に立つライオン」製作委員会

映画の舞台となる
ケニア・ロキチョキオのロピディン病院は
1987年にICRCが開設した
戦傷外科病院です

《キャスト・スタッフ》
大沢たかお 石原さとみ / 真木よう子
原作: さまざま「風に立つライオン」(幻冬舎文庫)
監督: 三池崇史 <http://kaze-lion.com>

風に立つライオン

「時代と国境を超え、受け継がれる命のバトン」

2015年3月14日(土)
全国東宝系にてロードショー

1987年にさまざましが
発表した楽曲『風に立つ
ライオン』。アフリカ・ケ
ニアで国際医療活動に
従事した実在の医師を
モデルに作られたこの曲
が、映画化されました。

3月9日まで駐日代表だっ
たヴァインセント・ニコ。当

時その立ち上げを行った
ということもあり、今回の
映画化にあたっては、赤
十字の立ち位置と任務
が現実に沿って描かれる
よう、脚本段階から関与
しました。

劇場に是非、足をお運び
下さい。



三池監督とニコ駐日
代表。「ロキチョキオ
の病院が見事に再現
されていて、自分も現
場に居たかのように
でした」とニコ

駐日事務所通信

パズルのピースを一つ一つ当てはめるように… リン・シュレーダー新駐日代表を迎えて

2012年7月より駐日代表を務めてきたヴァインセント・ニコ。今年3月9日に後任として着任したリン・シュレーダーと、日本とICRCの関係、また紛争地ではない日本における活動の課題や目標について話しました。

シュレーダー(以下LS)：日本には3年ほど前に旅行で来たことがありましたが、まさか仕事で戻ってくるとは思いませんでした。日本には豊かで多様な文化があり、伝統と現代という対比するものが共生していて、感銘を受けます。

ニコ(以下VN)：私にとっても日本は関係が深い国ですね。最初のミッションで行ったタイで日本赤十字社のチームと活動した経験は、私の中で日本への関心を高めるきっかけでした。最後の仕事を日本で務められたことは夢のような経験でした。

3年前
就任



に駐日代表にした私が目標としてきたことは、ICRCの活動

リン・シュレーダー

1997年、アルメニアで保護要員としてICRCでのキャリアを始め、ウクライナやコロンビア、スリランカと大陸を超えて経験を積む。フィジーでは複数国を管轄する地域代表部首席代表として、またチャドでは代表部首席代表として人道支援・保護活動の陣頭指揮を執る。

私がこの3年間行ってきたことを是非継続してしてください。紛争地での人道支援というオペレーションがない中でICRCの存在や関連性を示すのは非常に困難です。でもその努力を現状維持ではなく、新たなアイデアや想像力も取り入れながら発展させてください。

LS：駐日事務所は、これまで多くのことを達成してきましたが、これは常に続いていく仕事で、印象派の絵画を描くような作業だと思います。小さい点をあちこちらに書き加えて、パズルのピースを一つ一つ当てはめるように、全体像を組み立てていく。私の絵画は完成には程遠い状態ですが、日々これを完成させる作業をしていきたいと思っています。

ヴァインセント・ニコ

1980年、タイでICRCのキャリアをスタートさせて以来、担当地域は主にアジアとアフリカ。国際救援要員としてフィリピンやスーダンなど数々の国に赴任し、ジュネーブ本部では事業部アフリカ担当部長、アンゴラでは代表部首席代表を務めたのち、2012年7月に駐日代表に就任。

私としては、日本の重要なステークホルダーに一方的な支援をお願いするだけでなく、ICRCと同じ方向を向いて活動することが彼ら自身の利益になるよう取り組んでいきたいと考えています。

日本政府の政策や世界情勢によって状況は変わり続けていますが、ICRCは変化への適応も得意としていますので、たくさんのお機をを活用して、前へ進んでいきたいです。

VN：まだ現在進行形ですが、ICRCの知名度は日本国内で高まっていると思います。展示会やセミナー、シンポジウム、出版物など小さな取り組みを積み重ねてきた結果だと信じています。日本の全人口に働きかけることは不可能ですが、赤十字運動全体のためにも、今後のリンの活躍を心から応援します。



Kayoko Saito/ICRC

二人のこれまでの経験やICRCへの思いなど、対談の全文はこちら
jp.icrc.org/2015/03/09/nl23/



赤十字国際委員会 駐日事務所

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 5-13-1 虎ノ門 40MT ビル 6 階
TEL：03-6459-0750 / FAX：03-6459-0751

ICRC

ICRC駐日事務所

検索